

「カラーで見る太平洋戦争」を見て

2月2日(木)6限に平和教育の一環として太平洋戦争について学びました。前回は、プリントを使ってでしたが、今回は日本やアメリカが撮影した白黒の実際の映像をカラーにしたものを見ました。真珠湾攻撃から始まり、日本がいろいろな地域で玉砕した映像、特攻隊の別れの盃の映像、原爆のきのこ雲の映像、最後は玉音放送で終わりました。生徒たちは、真剣に映像を見て感じたことを感想文にしました。以下は生徒の感想文の抜粋です。

日本はアメリカを甘く見すぎていた。日本は自ら攻撃して、自ら降伏した。原爆を投下される前に降伏できたのではないかと思った。日本は本当に馬鹿だと感じた。

戦争を繰り返してはいけない。だから歴史という教科があるのだと思う。人として生きている以上、目を背けてはいけないし、向き合って考えていかなければならないと思う。

特攻隊の映像を見ると悲しくなる。あまりにも人の命を粗末にしすぎだと思う。いくら国のためだといっても私にはできないと思う。

戦争中は、日本軍が負けて撤退しても転進とごまかしたりして、正しい情報を国民に知らせていないということを知り、驚きました。

生きたくても生きられなかった戦争中の人たちのことを知り、今私たちは幸せに生きていられることに感謝して生活しようと思いました。

戦争中では相手の攻撃で死ぬだけでなく、凍死、餓死、病死などで命を失った人が多数いたことに驚いた。無念だったと思う。戦争は、その国の文化・生活・愛する人・子どもを奪ってしまう行為だ。

自分と同じ年の人が戦争で戦っていたり、工場で働いていたたりするのを見て当時はそれが当たり前だったかと思うと、今の生活を大事にしたいと思った。

戦争は、資源や植民地が手に入るのはわかるけど、映像で見たように死体の山を築くだけだと思った。

戦争は自然や動物たちにも被害が及んでしまう最悪な手段だと思う。

戦場に行く人も、その人たちを送り出す人もつらい立場だと思う。その人たちの気持ちを考えるだけで、悲しくなった。

日本の植民地となった現地の人たちは日本の国旗を振っていたが、本当のところは日本のことをどう思っていたのだろうかと思った。

日本のために命を落とすことは大変名誉なことだと両手を挙げていたけれど、この世を去ってしまうことに恐怖を覚えていた人も少なくなかったのではないかと思った。学生で徴兵され、社会へはばたく間もなく散っていった命がたくさんあったかと思うと、悲しい。

学童疎開で地方に疎開した子供たちは、親がいなくて歓迎もされていない土地で、どんな気持ちで日々を過ごしていたのだろうと思った。原爆を2度も落とされた日本は、世界に原爆の恐ろしさや悲惨さを伝えていかなければならないと感じた。